睾丸脱出症追加例

岡山医科大学皮膚科泌尿器科教室 (主任 根岸教授)

副手 医学士 成 川 俊 光

副手 医学士 大 村 順 一

T. Narikawa and J. Omura : Luxation of the Testicle : Case Report.

緒 言

先天性停留睾丸は些程稀有なるものに非ざれども、正常位に下降せる睾丸が何等かの原因に依り、後天的に陰嚢外に脱出する事は極めて稀れである。而して睾丸脱出症 (Luxatio testis) なる疾患は 1885 年 Bruns の記載に始まり、本邦に於ては 1918 年下平氏の報告を以て嚆矢とするも、1941 年岩下氏の精細なる記述により、漸く本症に就ての全貌が明らかになった。本症の定義に就ては種々あるも、岩下氏は次の如く、即ち「陰嚢底部に迄、正常に下降した睾丸が、殆んど總ては外傷により直接或は間接に、少数には外傷とは無関係に陰嚢外の何れかに脱出したもの」と謂う。

著者等は偶々本症の典型的なる例を経験し、而も本例は原因的に極めて興味あるものなれば、茲に報告し、諸賢の御高評を仰がんとするものである。

自 験 例

患者、新〇伊〇、20 才、潜水夫、家族歴：父母共に老衰にて死亡、同胞なし。既往症：19 才の時大腸炎にて 2 ヶ月の医治により快癒、其の他著患を識らず。現病歴：患者は 15 才の時潜水練習施行中、送気管断裂のため水中にて 5 分間苦しみ、意識不明となり潜水船上に引き揚げらる。当時眼、耳、鼻出血あり、其れ以後左睾丸は陰嚢より脱し、鼠蹊部に在り、睾丸は移動性なりしを以て某医に依り非観血療法の結果幸にも陰嚢上端に還納しありしも、再び数日前より該部に牽引痛あり、且つ睾丸は鼠蹊部に再脱出せるを以て受診す。現症：(昭和 17 年 7 月 19 日) 体格、栄養共に中等度、顔貌尋常瞳孔左右同大正円、対光反射迅速、口腔粘膜に異常なし、觸知淋巴腺に異常なく、胸部心界正常心音各清純にして、呼吸管に異常を認めず、腹部平坦軟柔にして肝脾を不觸、其他四肢正常、赤血球数 440 万、白血球数 4800、血色素量 70% (ザーリ

氏法)、白血球百分率に異常を認めず。

第 7 図

泌尿器生殖器所見：両腎共に不觸、両側輸尿管走行に自発痛、圧痛共になく、膀胱部に異常なし。陰莖は完全包莖を呈し外尿道口に発赤腫脹なく、尿道走行に圧痛なし。攝護腺正常大にして、精嚢は之を觸知せず。右睾丸、副睾丸、は共に正常大にして、陰嚢内に存在し、精系も亦尋常なり。左側陰嚢内に睾丸副睾丸並に精系の如きものを觸知せず、左鼠蹊部、外鼠蹊輪より約 5 ㎝上方に鵝卵大の腫瘤を觸知し、圧すれば睾丸痛を訴え、周囲組織との癒着も軽度にして、之を下方に引き下ぐるに、幸じて外鼠蹊輪部に來るも、患者疼痛を訴うるに依り陰嚢内に還納は不能なり。

診断：鼠蹊部睾丸脱出症兼完全包莖

手術所見：12 月 29 日、局所麻酔の下に左鼠蹊部ブーバルト氏靱帯に並行に約 10 ㎝の皮切を加え、外

科腹筋腱膜を切離し、鼠蹊管を開く、睪丸は鼠蹊管略々中央部に在り、周囲組織との癒着は高度ならず、総莖膜を開き検するに睪丸は拇指頭大に萎縮し、灰白色を呈す。副睪丸は正常大にして、貧血状を示し、両者の離間は認められず、依つて一旦之を縫合せり。精系は中等度短縮を示めし、之を内鼠蹊輪まで剥離追及するに、睪丸は陰嚢底に達するを以て之を固定し、Lanz氏法に従ひて、針を睪丸より、陰嚢を通じ同側大腸に固定し手術を終る。術後経過：創は第2期癒合を営み治癒に5週間を要したるも、固定絲は1ヶ月後に切断せり、睪丸は術後4ヶ月に至るも陰嚢底に固定しあり。

考 按

本症例は、患者潜水中送気管切断し、約15分間水中に在りて意識不明となり引揚げられたる時は、鼻腔、口腔、眼出血等ありと言う、即ち潜水中の内外圧力の激変に依り本症を惹起せるものと思惟す。又水中に於て、其の瞬間、障碍物に直接激突したるかは、一応考えられる処なるも、患者意識不明と成り、当時の状況を詳にせず、恐らくは非常なる身体内圧のため、挙睪筋攣縮を來し、同時に外鼠蹊輪の拡張、陰嚢頭の弛緩等之に関與し本症を惹起せるものと考えらる。患者は意識恢復したる後、睪丸脱出に気付き、某医師の非観血療法(Mobilisation)に依り陰嚢上端に達せるを以て満足せりと述ぶるも、其の後数年間該位置に固定せるや否やは別として、今回受診するに至るの間差したる支障を來さざりしは事実なり。本症は前述の如く極めて稀にして、岩下教授の調査に拠るに、本邦に於ては僅に9例、外國にありては84例発表あるのみにて、著者等の症例は本邦にては第10例目に相当す。著者等は本症名称Luxatio testisを「脱臼」よりも、寧ろ「脱出」と命名されたる同教授の説に賛意を表す。Alyeaは本症を(1)表在性脱出、(2)内在性脱出、(3)陰嚢外露出の3大別せり。患者等の症例は其の成因並に手術所見よりして、内在性鼠蹊部脱出と思惟す。

而して本邦例9例中8例は表在性にして、内在性は僅かに碓及び林氏の1例のみにして、本報告例は本症の大多數例に於ける如く、20才の若年者であり、

且又基因後6年を経過せるに、其の間些したる苦痛を覚えざりし興味深きものなり。

結 語

- (1) 著者は、20才の潜水夫にして、定型的なる睪丸脱出症の患者を経験せり。
- (2) 本症例は、本邦にては第10例目に相当す。
- (3) 本症はAlyeaの分類に従えば、内在性右鼠蹊部睪丸脱出症と唱うべき症例にて本邦にては第2例目なり。
- (4) 本症の外因は、潜水中送気管切断に依る、内外圧の激変と言う極めて興味あるものにして、受傷前は睪丸は両側共に陰嚢内に在りたるものなり。
- (5) 本症の内因として、挙睪筋の攣縮、外鼠蹊輪の拡張並に陰嚢頭の弛緩が考えらる。
- (6) 総莖膜に変化なけれども、拇指頭大に萎縮せる睪丸と、略正常大の副睪丸を認め、精系周囲との癒着は極めて軽度なり。
- (7) 療法として、Lanz氏牽引法を選び、術後4ヶ月に至るも睪丸は陰嚢底に固定しあり。

稿を終るに際し、御指導御校閲を賜りし恩師根岸教授並に御指示を頂きし山崎博士に深甚なる感謝の意を捧ぐ。

(本論文の要旨は第52回日本皮膚科学会岡山地方会に於て報告せり)

主 要 文 献

- (1) 岩下健三：日本泌尿誌，32巻，1号
- (2) 下平用彩：実験医報，4年，40号
- (3) 藤田秀一：実験医報，4年，45号
- (4) 浜西・猪口：皮膚科紀要，7巻，6号
- (5) 裕・林：日本外科寶函，15巻，2号
- (6) 神近克己：軍医國誌，300号，昭13年
- (7) 萩野金人：日本外科寶函，13巻，5号
- (8) 高橋・岩下：日泌尿誌，30巻，1号
- (9) 渡辺一郎：日泌尿誌，30巻，1号
- (10) 渡辺敬：外科，2巻，4号
- (11) Alyea, E. P. : Surg. Gynec. & Obst. 49 : 1929.
- (12) Bruns : Beitr. Z. kl. Chir. I : 485, 1885.